

## Japanese Journal of Statistics and Data Science 立ち上げから 5 年半の歩み

青嶋 誠 (筑波大学、JJSD 前編集長)

2022 年 10 月末をもって、2017 年から務めた Japanese Journal of Statistics and Data Science (JJSD) の編集長を辞任しました。編集が軌道に乗り、編集長就任時の目標も達成の見通しがあるとの知らせを受けましたので、JJSD は節目を迎えるものと判断し、現統計関連学会連合理事長の樋口知之先生 (日本統計学会会長) に、辞任の申し出をさせてもらいました。現在、新編集長の増田弘毅先生のもと、JJSD は第二フェーズに進んでいます。本稿は、JJSD のこれまでの歩みを纏めるものです。

日本統計学会会報 No.173 (2017.10.30) に、当時の統計関連学会連合理事長の岩崎学先生が執筆された「Japanese Journal of Statistics and Data Science 発刊の経緯」があります。統計関連学会連合がオフィシャルジャーナルを発行しようという構想は、岩崎先生が連合理事長に就任された 2015 年 4 月から連合理事会で議論され、議決までに 1 年半を要したとのこと。連合は、日本統計学会、日本計算機統計学会、日本行動計量学会、応用統計学会、日本計量生物学会、日本分類学会の 6 学会からなり、学会ごとに事情が異なるため、一筋縄ではいかないご苦労があったかと想像します。岩崎先生のご尽力に敬服します。岩崎先生からは、編集長として本構想に関わるようにと何度か熱心なお誘いを頂戴していました。2017 年 4 月、栗原考次先生が理事長になられ、編集長就任の依頼を正式に受けました。

創刊までの 1 年は、Springer 社との契約、雑誌名の決定、事業委員会の立ち上げ、編集委員会の立ち上げ、編集システムの立ち上げ、創刊号の企画立案や投稿募集などを、怒涛の如く進めました。事業委員会の栗原先生と岩崎先生には、特に契約面で大変お世話になりました。先生方のお陰で、編集に注力することができました。編集面は、当時、私が Journal of the American Statistical Association (JASA)、Journal of Multivariate Analysis (JMVA)、Statistica Sinica など 5 誌の編集を手掛け、過去には日本統計学会欧文誌の編集長、日本統計学会和文誌の編集長、Communications in Statistics の Guest Editor などを務めてきましたので、その経験とネットワークを活用しました。雑誌名については、数多ある (ときに怪しい) 雑誌との差別化を図るために、統計関連学会連合が運営することを強調して、敢えて名前に 'Japanese' を入れました。創刊号 (JJSD, 2018) の "A new journal in data science" には、この経緯を書きました。また、創刊号の特集として "Special feature: perspectives on data science for advanced statistics" を企画しました。執筆期間が僅か半年の無理なお願いにも国内外の錚々たる先生方が執筆にご賛同くださり、2017 年 12 月に予定の原稿が揃い、2018 年 4 月には査読・改訂・校正へと進み、10 編の特集論文と 3 編の原著論文など計 13 編からなる 246 頁の創刊号を、2018 年 6 月に刊行しました。短期間での査読願いとなったにも拘わらず質の高いレポートをお送りくださった国内外の先生方、そして、厳正な審査プロセスをスケジュール通り進めてくださった編集委員の先生方には、頭が下がるばかりです。お陰さま

で創刊号はダウンロード数が4万を超え、JJSDは出版界に驚きをもって迎えられました。

第2号以降の特集やサーベイ論文の企画は、各学会を代表する15名のCoordinating Editor (CE)の先生方とAssociate Editor (AE)の先生に、担当をお願いしました。お陰さまで、6月と12月に発行する2つの号の総ページ数は、435頁(2018年)、667頁(2019年)、746頁(2020年)、1321頁(2021年)と順調に発展しました。特に2021年は、6月号の特集担当の増田先生と、12月号の特集担当の江村剛志先生、Il Do Ha先生のご尽力により、掲載52編中33編が海外からの投稿です。私が辞任する2022年10月まで、投稿数は毎年100本程を維持し、採択率は35%でした。投稿から査読を終え編集長の私がFirst decisionを著者に通知するまでの日数は、33日です。これは大変優秀な成績です。

雑誌のスピードは、著者から信頼を得るための一つの指標です。この点、Springer編集部には、私の無理な注文も最大限に対応していただきました。立ち上げ時の簡素な編集システムをトップジャーナルの編集環境にすべく、様々な改善を提案させてもらいました。それでも、著者からは、私が見落としした遅延案件にクレームを頂戴したこともあります。その度に真摯に迅速に改善してきました。事務局から届く投稿が私の手元に滞在する時間は、概ね5分です。CE、AE、レフェリー、著者、そして事務局、これらの何処の段階で遅延が発生しているのかを検出し、可能な限り自動でマネージメントする編集システムを目指しました。

JJSDの`Fast track`、`High quality`、`Broad audience`という3つのメリットは、創刊時から至る所で宣伝させてもらいました。創刊翌年の2019年には、Springer統計学分野ダウンロード数のトップ10に、JJSDから3つの論文がランクインするという快挙が飛び込み、さっそく統計関連学会連合にJJSD広報のためのTwitterを開設してもらいました。2020年には、創刊2年キャンペーンをSpringer社にお願いし、2か月間のフリーアクセス化が実現しました。また、同年、Transformative Journalに登録し、将来の完全オープンアクセス化に向けて舵を切りました。2021年には、お陰さまでScopusに採択され、CiteScoreが付与されました。さらに、Emerging Sources Citation Indexにも採択され、Web of Scienceに登録されました。また、編集委員会において5%にも満たなかった女性比率について改善を図り、CEから推薦のあった女性研究者の多くの方にご賛同いただき、JJSDの編集にお力添えを賜ることとなりました。編集委員会の女性比率は20%となり、これはレフェリーの女性比率と同程度です。

編集長就任時、Impact Factor (IF)の取得が一つの目標になっていました。私は、IFに偏重した編集は好ましくないものの、正当な評価としてIFが付与されることは望ましいことであって、宣伝効果があるだろう、という考えで進めてきました。2022年の辞任まで、Springer編集部とも何度かIF戦略会議を開き、編集委員会で幾つかの戦術を試みてきました。成果は着実に現れています。IF付与の条件は変わる可能性があります。

ますが、お陰さまで JJSD はいい位置に来ています。

私は JJSD の第一フェーズの編集長として、当たり前指揮と営業をただけで、特別なことをしたわけではありません。JJSD は、増田編集長のもと第二フェーズに入りました。これからは、編集委員会のスリム化による機動力が大事になることでしょう。きっと、増田編集長のもと新体制が動き出す頃に、好い知らせが届くのではないのでしょうか。そうなることを願います。末筆ながら、皆様方の JJSD へのご支援に心から御礼申し上げますとともに、今後の発展にもお力添えの程、何卒、宜しく願い申し上げます。